100円ショップから

グローバル経済を考える

アジア太平洋資料センター（PARC)

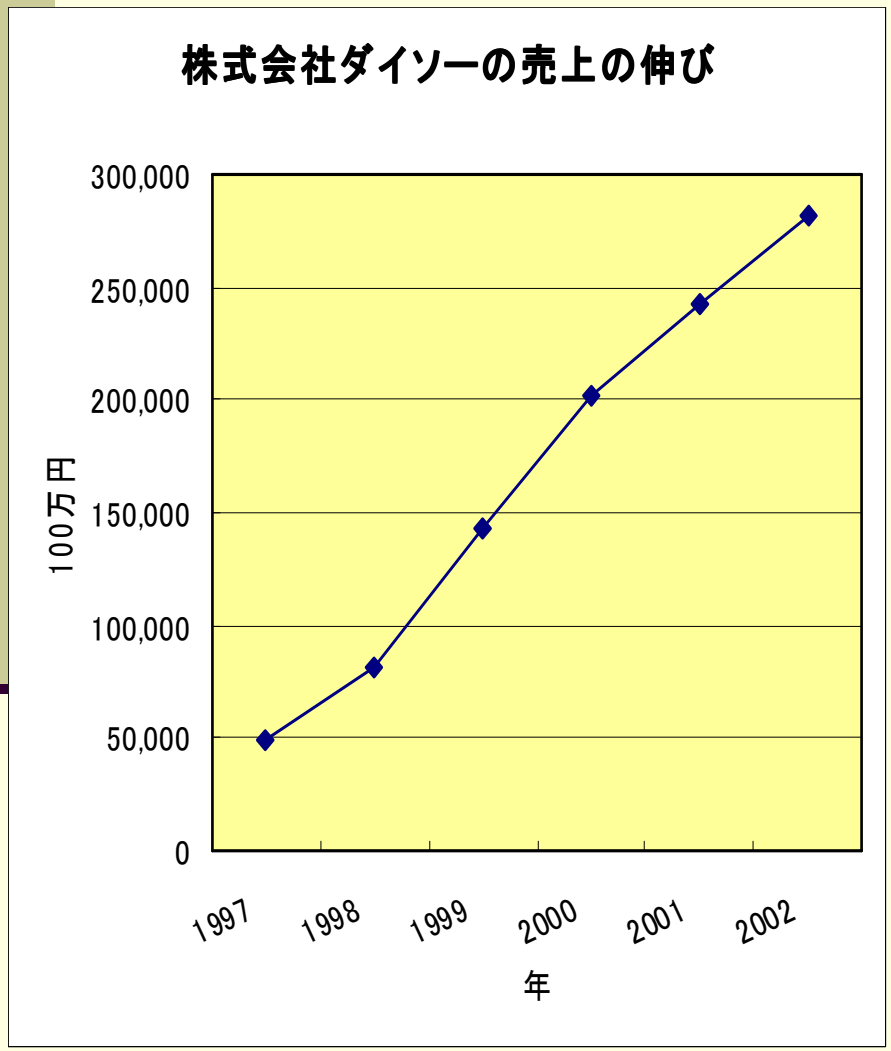
１人年間28個以上を買っている。

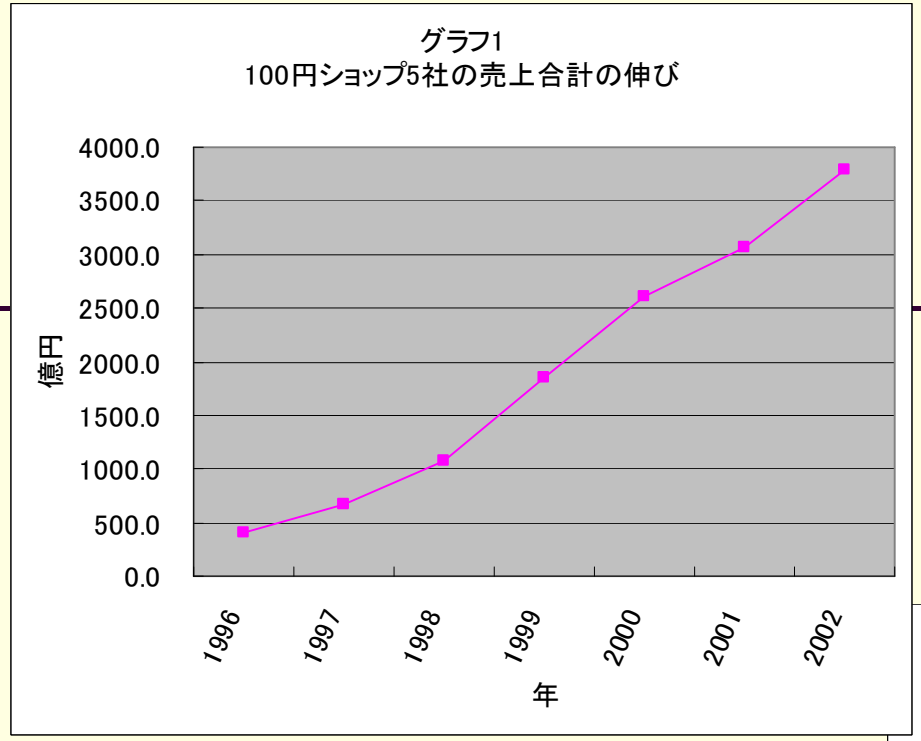
- １００円ショップ最大手、ダイソーの2002年の売上は2812億円、商品数にして28億１２００万個。
- トップ4社の売上合計は3654億円。商品個数にすると36億5400万個。
- 赤ん坊から老人まで含めて日本人一人当たり2002年１年間で28個の100円ショップの商品を買ったことになる。中小の100円ショップを含めると、この数はさらに増える。

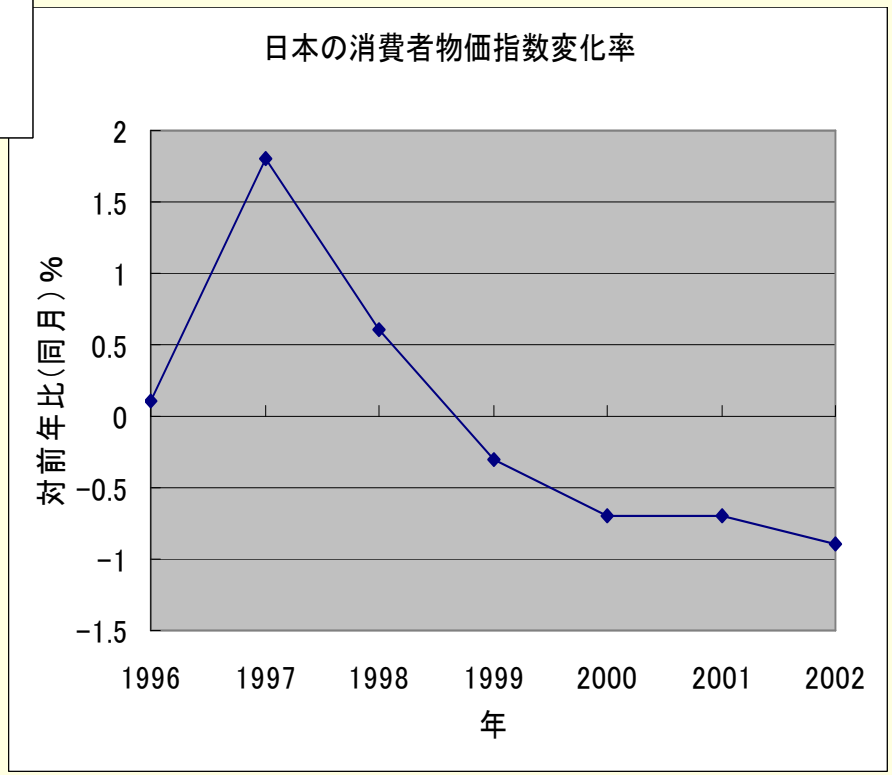
不況と共に成長した１００円ショップ

- 業界トップのダイソーが初めて100円ショップに着手したのは1987年。直営店1号を開設し、チェーン展開を本格化したのは1991年。
- 業界2位といわれるキャンドウが常設１００円ショップを設けたのは1993年、売上が急速に伸びたのは1997年だった。
- ちょうど日本でバブルがはじけ、長期不況に突入したときであり、世界的に経済のグローバル化が本格化した時期である。2000年に入って売上の伸び率はやや鈍化しているとはいえ、この不況下での売上の伸び率は驚くべきものがある。

ダイソーの場合、5年間で売上は6倍近くまで上がっている。







日本におけるデフレの進行と平行して伸びた100円ショップ

文具など、どうして生活に必要な多くのものがそろっています。

最近では本やCDまで扱っています

100円ショップの商品にはプラスティック製品が多い。

日本の家庭ゴミの6割はプラスティック製品といわれている。100円だから、安いからといって買ってしまった商品がこのプラスティックゴミの増加に寄与しているのではないか、と危惧される。

店のレイアウトを楽しく、衝動買いを誘う

平均して1回の来店で5－7点くらい買う。

食品は国産品が多い。

銘柄品で量が異なるものなどもある。量も同じ商品がスーパーなどより安く売られていることもある。

一度に大量に仕入れることで低価格を実現している。

さらに賞味期限が残り少なくなったものを一時に大量仕入れするという方法もある。

どうして100円でできるの？

- まず従来の卸問屋などの中間業者を廃し、工場から店に直結。
- 大量に現金仕入れすることで安価な仕入れ
- 海外の工場からの仕入れ
- 経費を極限まで削減

（1）売上規模に比して従業員数は非常に少ない。

（2）流通コストの削減

（3）広告宣伝費をかけない。

経費の徹底削減＝パート従業員が大半

- 100円ショップは多くの店が店長以外はアルバイト、パート職員で売上規模に比して従業員数は非常に少ない。

	従業員数	売上
ダイソー	１０００人	２８１２億円
ｲﾄｰﾖｰｶﾄﾞｰ	１万４１３９人	１兆５０６１億円
	（１４倍）	（約５倍）

商品の値札付けも必要なく、店員に商品知識も求められない。

１００円ショップの商品はどこから？

- 製品の半分くらいが国産品、他が海外産。
  海外産の6割以上が中国、ついで韓国、台湾で、インドネシア、タイ、ヴェトナムなどが散見される程度。

- 仕入れルート
  1. 出来合いのものを直接仕入れる。
  2. 中小メーカー（工場）と直接契約
  3. 倒産した企業から仕入れる

国産の有田焼が100円で登場したのはショックだった。この窯元は徹底した合理化、機械化で大量生産を実現。地元ではやや孤立気味。

有田の風という陶器は一見、国産品かと思われますが、実はタイ製

かご類は中国製のほかベトナム製も最近増えてきている。

インドネシアのバティック製品などもあります。しかし、このような伝統工芸品は100円ショップのような大量仕入れには合わず、現地での家族単位での生産がこわれるといった問題も起こっていると言われます。

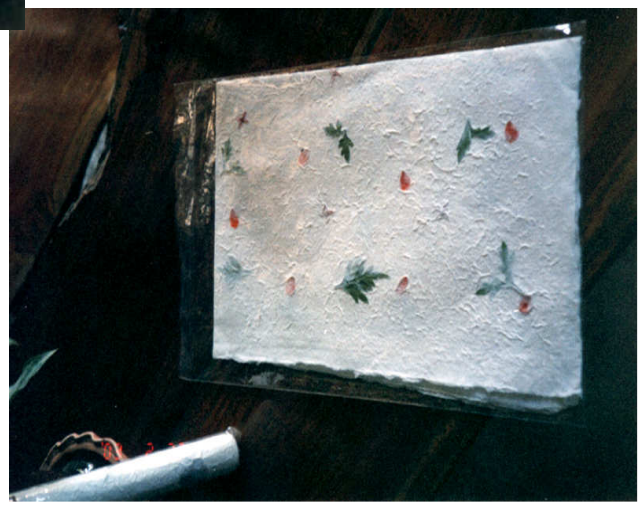
「和紙」の紙袋など自然の花のあしらわれた製品はタイ北部チェンマイ近くの農村の女性たちが手作りでつくったものです。

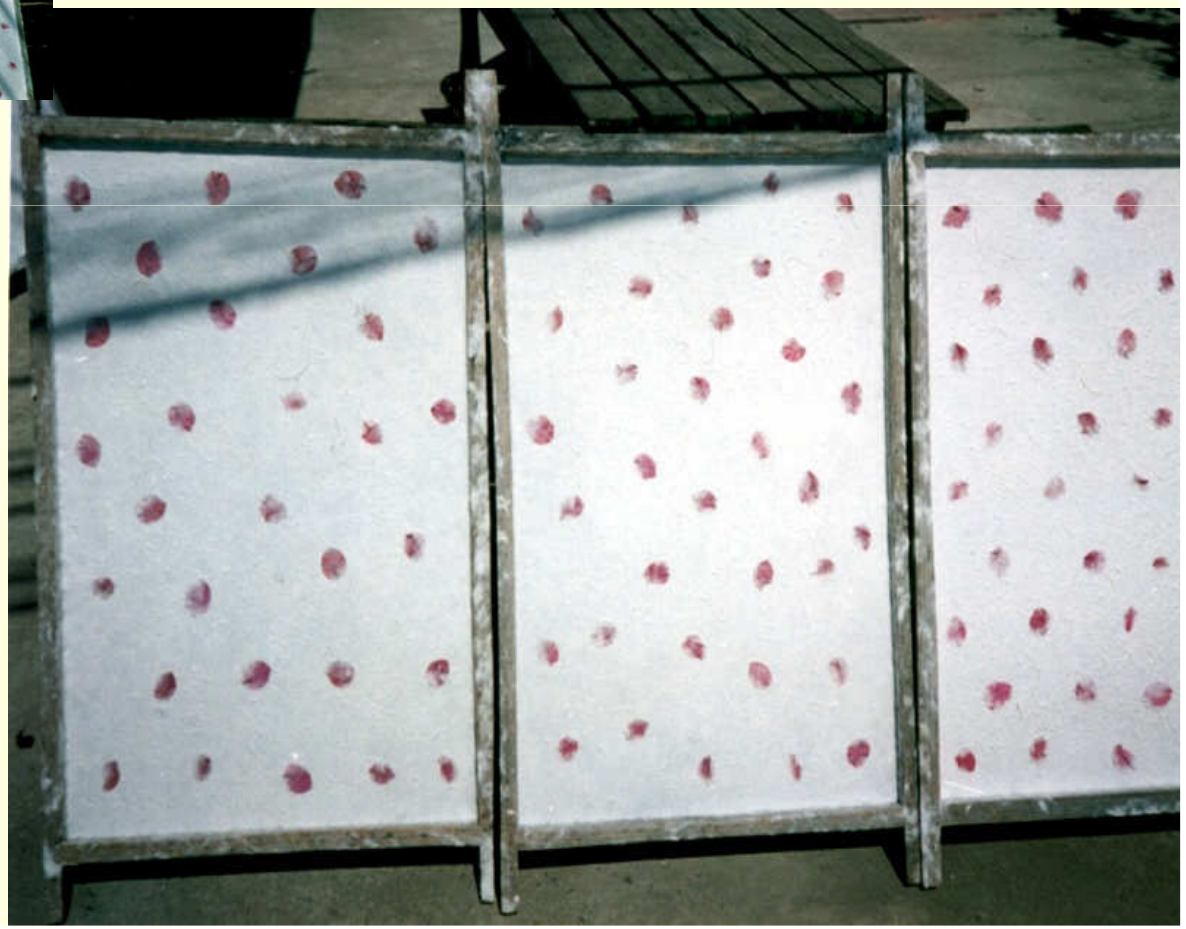
タイ、チェンライ県のプーケー村で、村の女性たちが紙を漉き、近所でとってきた草花を差し込みます。

働いているのは近所の農家の女性たちで、紙漉きの労賃は一日70－80バーツくらいです。日本円にするとおよそ200円くらいです。

紙漉きは、この地方では昔からの伝統技術だということです。

紙の中に漉き込まれている草花は家の周りに自然に生えているものを摘んできました。





ラーチャールー村にあるジャビエ芸店が周囲の村の人たちが作った製品を集めて、100円ショップ向けに出荷します。

ジャビエ芸店のスチャさんが100円ショップに品物を出すようになったのは2000年からだそうです。

箱詰めも、このジャビエ芸店で行われます。

時計も100円ー中国製

衣類、Tシャツなど一部は200円の商品もあります一すべて中国製です。

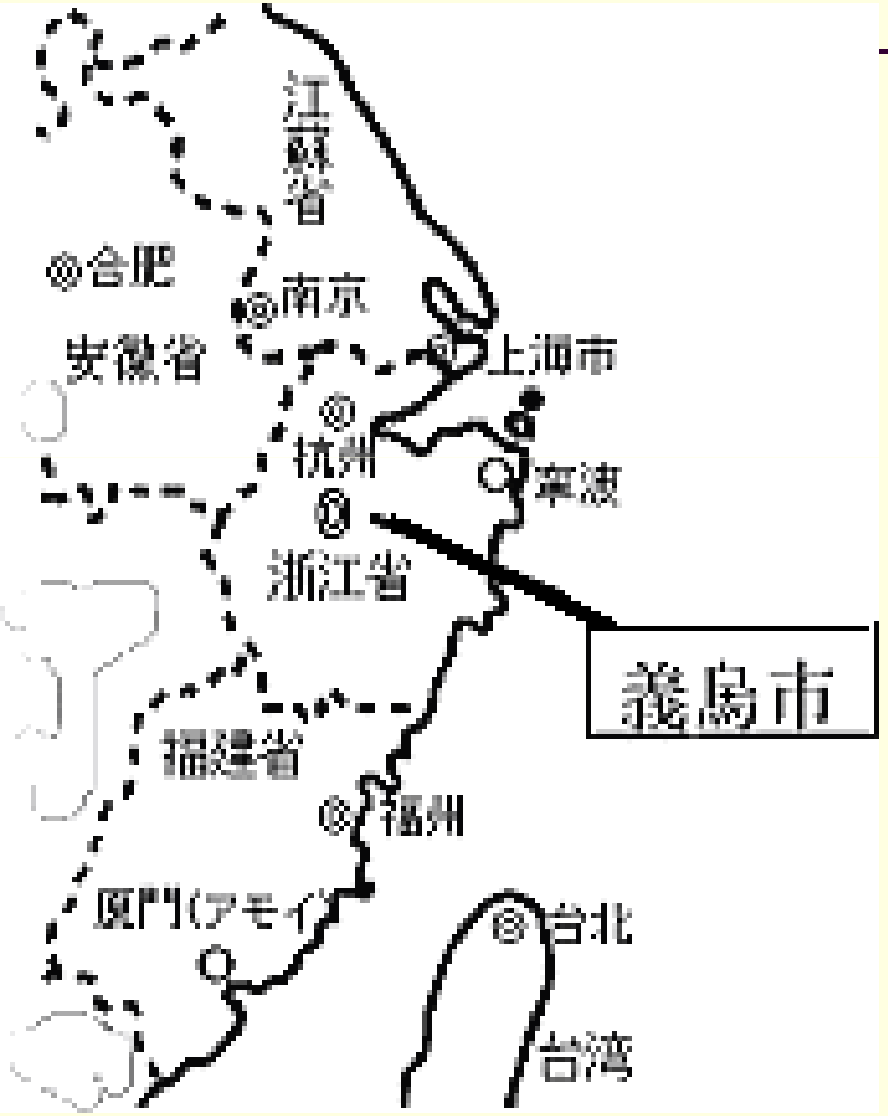
下着なども100円、200円(中国製）
スーパーなどもこの価格に対抗せざるをえない。

生活に必要なものが多くそろっていますーー竹製品などー見日本の伝統的商品のように見えますが中国製です。

日本の民芸品のように見えますがすべて中国製

袋モノなども中国製がほとんど。

中国、上海の南の浙江省 の中央部にある義烏市（イウ）には農村の中に突如として現れるグローバル市場があります。



浙江省の中央部にあり、州都の杭州市から南へ約100キロ、高速道路を約2時間ほどのところにある。上海から特急列車で5時間ほどのところである。内陸の盆地で周囲は農村地帯である。

東京ドームのような巨大な商品城という市場が数箇所あり、衣類、雑貨、陶器、めがね、工具、造花、バッグ類など、１００円ショップで売られている商品のほとんどをこの商品城で見出すことができます。

商城のなかには周辺の工場が店を出しています。

巻尺が一個2．6元（37。7円）。100円ショップで売られている工具などのほとんどが揃っています。

スティール製のお玉が3．4元（49.3円）

ダイソーのクレヨンも見つけました。

100円ショップで売られているのと同じ造花の市場もあります。

陶器類も数多く、コーヒーカップ（受け皿つき）が1セット約20円など。このまま100円ショップの棚であっても良いような商品がならびます。

縫いぐるみ等は一個20-30円

100円ショップで老眼鏡が売られているのを見たときは衝撃でしたが、ここ義烏では老眼鏡が1個2．4元（34．8円）で売られています。サングラスなども同じ値段です。

１００円ショップでよく見かける商品のイウ市場での価格

- ５mの巻尺（幅広）　2.6元　（37.7円）
- 同（幅の細いもの）　1.2元　（17.4円）
- ドアの取っ手　2.5元　（36.25円）
- 包丁のセット(5本いり)　18元-45元（261円-652.5円）
- なべ返し、お玉などのセット　6.8元　（98.6円）
- 鍵（スーツケースなど）　1個　0.67元　（9.71円）
- おたま（スティール製）　3.4元　（49.3円）
- 定規（3枚入り）　0.32元 (4.64円)
- 筆箱　0.75元（10.87円）

元々は農村だった、この地方に、商品城を中心に新興工業地帯が出現しています。ネクタイ、シャツ、造花、袋物などはこれらの工場でつくられています。

日本からやってきたバイヤーたちは市場で品物を見つけると、工場に直接出向いて、注文します。大きなロットで注文するので市場での価格よりさらに安いことが予想されます。

そうした工場のひとつで100円ショップ向けの袋をつくっていました。

働いているのは周辺の農村からやってきた若い女性たちです。

住込みで働いており、休みの日には友人とおしゃべりをしたり、洗濯をしてすごします。

勤務時間は朝8時から夜9時まで（昼休みと夕食休みが各1時間）

給与はミシン工の場合で、月600元（8700円）くらいが相場。

検品の後、ビニールの袋に入れ、箱詰めまでして出荷します。

箱には大創産業専用工場と書いてありますが実際には専用工場ではなく、12万個などの大量注文を1-3ヶ月で消化します。いわゆるOEM生産ですが、継続して注文がくるかどうかは分かりません。

造花工場：かなり機械化されており、100円ショップが求める均一な品質による大量生産が可能になっている

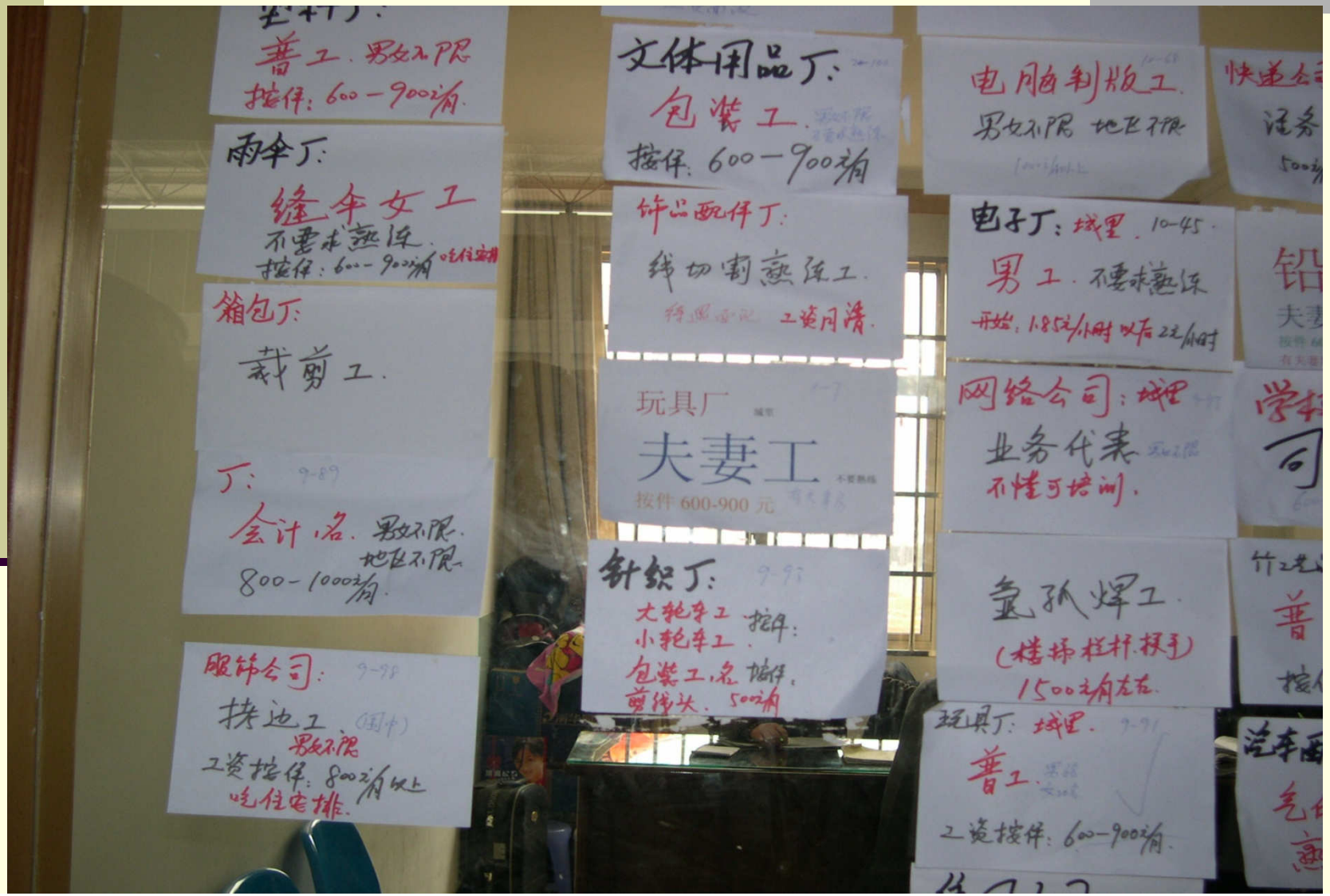
町の外れにも小さな工場がある。
周囲はまだ古い農村のまま。

タオル工場　農村の学校を改造している。

このタオル工場で働いているのは近隣の農家のひとたち。

日本のハローワーク(職安)に当たる労働市場は毎日周辺の農村からやってきて職を求める人たちがあふれている。

労働市場の窓口にはお針子600－900元などの張り紙



若い女性が袋に身の回りの品を袋につめて職を求めて農村からやってくる。他方、工場の側も人手が足りなくなると条件を書いた紙をもってやってくる。話がまとまるとそのまま工場の寮へ。

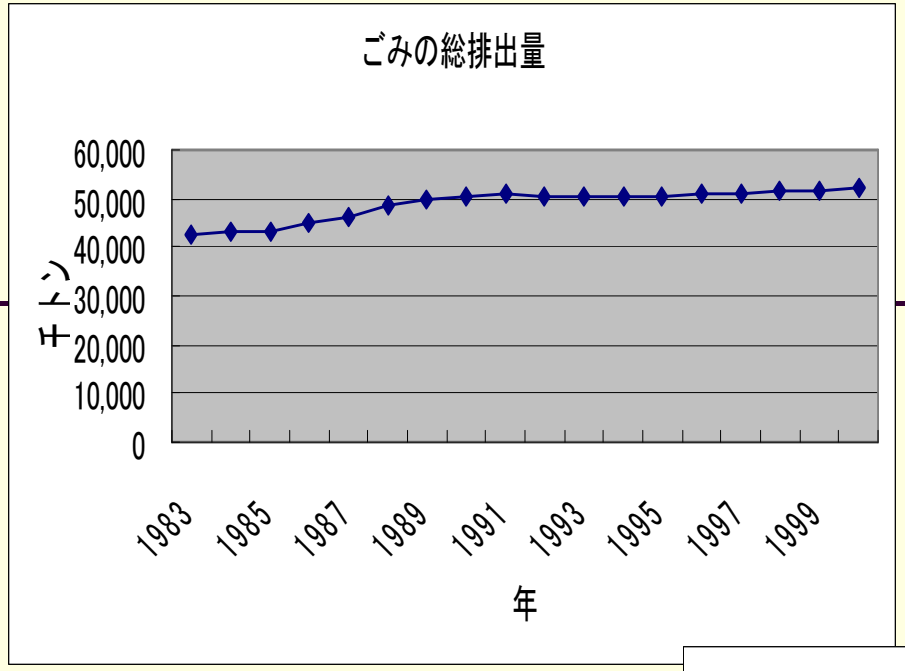
日本の私たちから見ると信じられないような厳しい労働条件だが、中国の現実のなかでは、それでも農村から出てくる女性たちが後を絶たない。

中国の農村の貧困が100円ショップを可能にする。

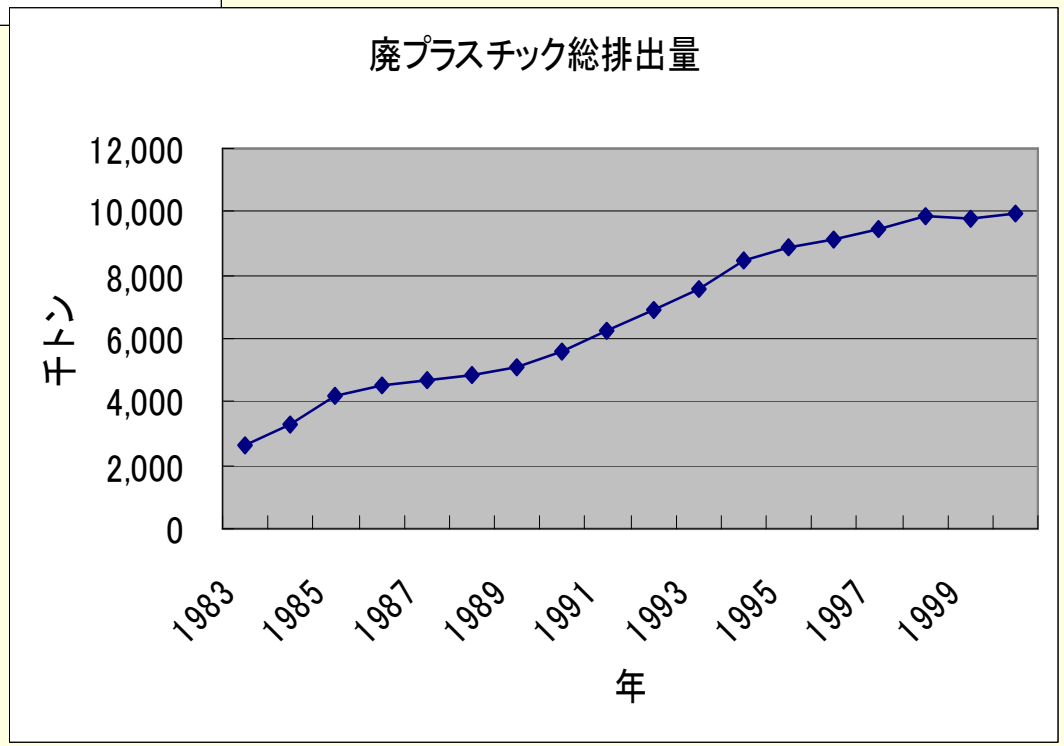
- 中国の農村は貧しい。農民一人当たりの農地面積は0．14ヘクタールと、せまいといわれている日本の1.07ヘクタールの7分の1くらいしかない。農産物価格は低下している。農民1人あたりの所得は年間2475元(3万5887円)。これは全国平均で内陸の山間部などでは1000元(1万4500円)くらいにまで下がる。もちろん、中国政府がドルに対して実勢価格より低い比率で元を固定相場制にしているので一概に円換算した数値で考えられない側面はあるが、この農村の貧しさが中国製品の低価格を支えているのである。

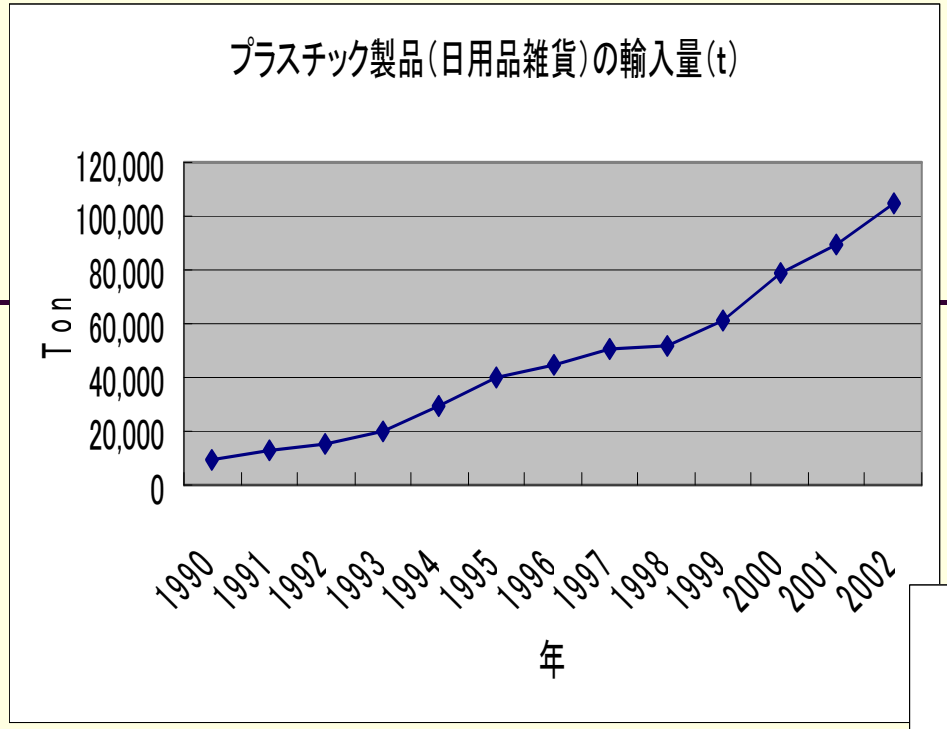
１００円ショップどう考えるか

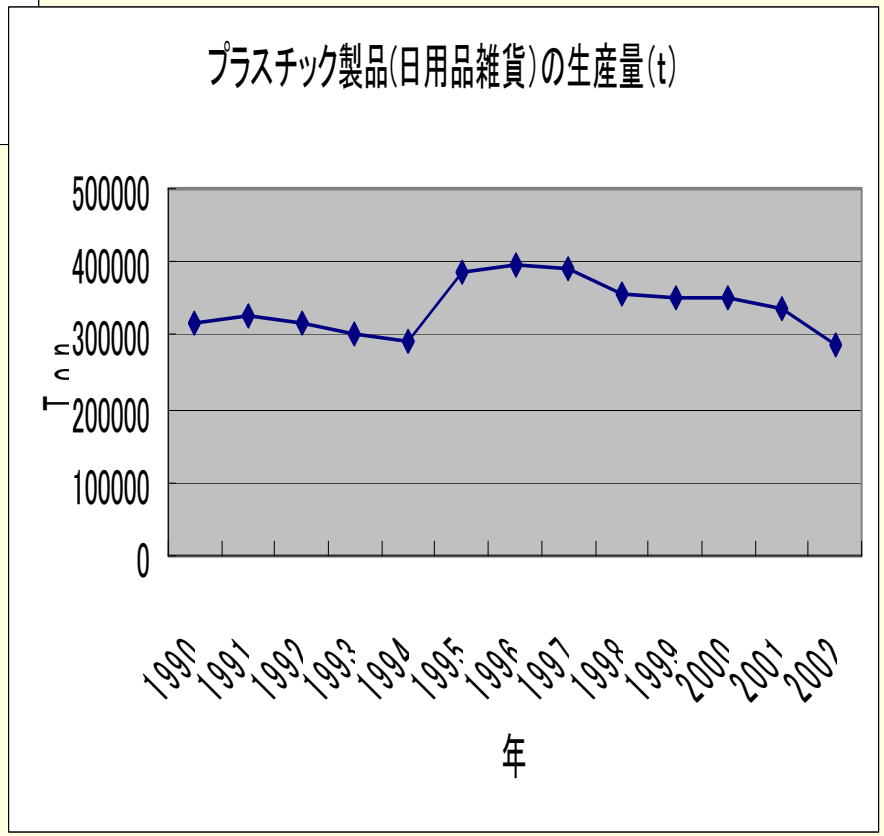
- 不況時代に大量生産・大量消費・大量廃棄を実現
- スーパー、デパートなどをまきこんで低価格競争
- 小規模な小売店（文具店、陶器店など）は対抗できない。
- 生産者ー流通業者の安定的な関係を破壊
- 不安定な雇用
- 中国の生産者（労働者）までも巻き込んだ絶えざる競争



ごみの排出量はバブル崩壊後、微増にも関わらずプラスティックゴミは増え続ける



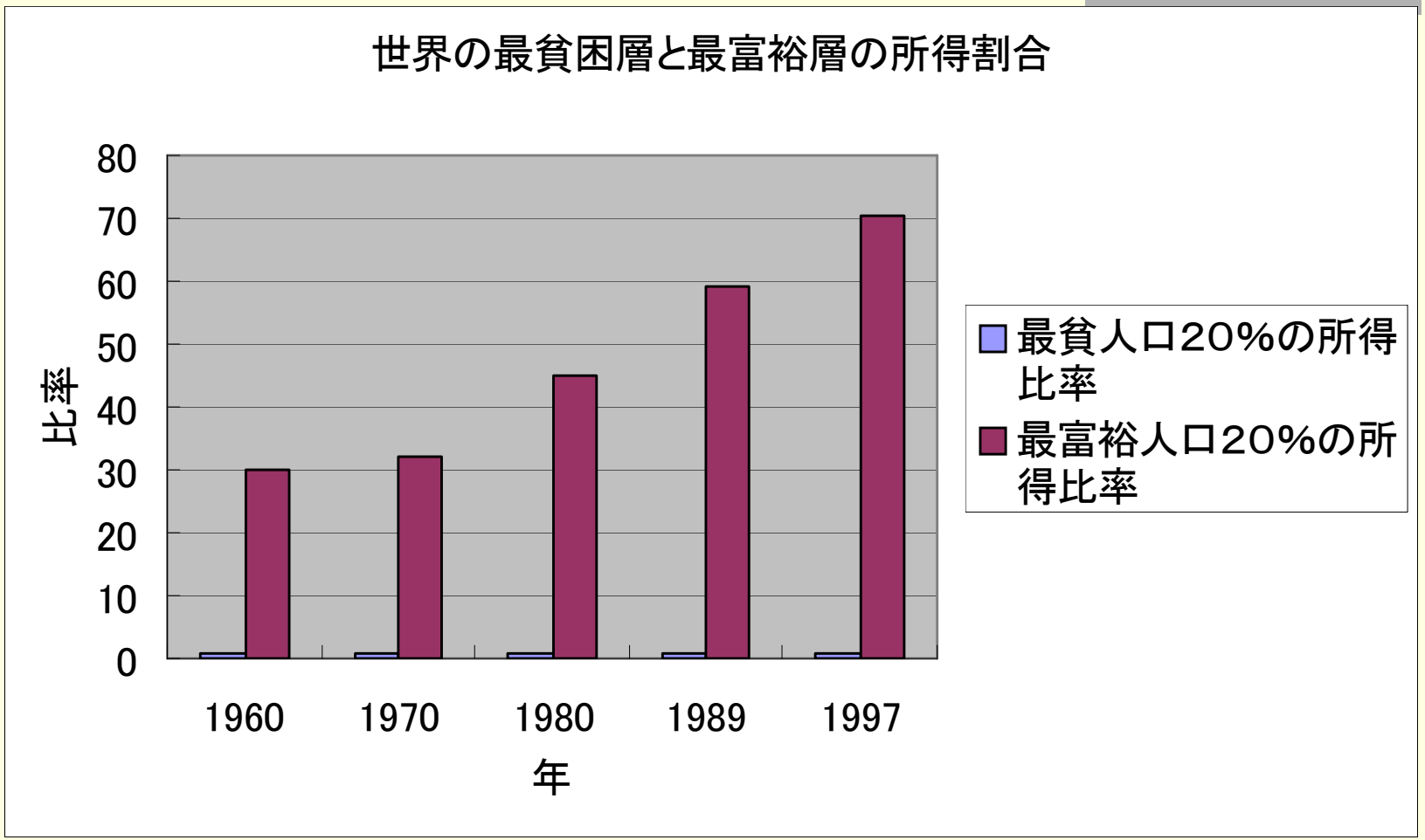




プラスティック・ゴミの増加の大半は安価な輸入製品の増加による

グローバル化を推進する貿易の拡大

貿易の拡大と同時に進行した貧富の格差
――各国間と各国内



完